恋は
白夜に眠る

藤村かおり

海越出版社

恋は白夜に眠る

一九九三年三月三十一日　第一刷

著　者　藤村かおり
発行人　天野　作市
発行所　海越出版社
〒461　名古屋市東区葵1の26の12
電話　〇五二・九三五・八四五八(代)
振替口座・名古屋5—64920
印刷所　日本高速印刷株式会社

定価はカバーに表示しています。

© KAORI FUJIMURA
1993. Printed in Japan
ISBN4-87697-152-8
落丁本・乱丁本は海越出版社にお送りください。
お取り替えします。

■恋は白夜に眠る■もくじ

恋は白夜に眠る……3
銀紙の指環……139

装画・なわハルミ
装幀・山崎　ゆき

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

恋は白夜に眠る

1

平らだった道が少しずつ上り坂になり、ペダルを踏む足に力を入れていく。簡素なミニサイクルにはギアなどついていないから、坂道では自分の両足を頼りにするしかないのだ。深く空気を吸いこみながら、もものあたりに力をこめて右、左、と漕いでいく。

起きぬけのような朝の空気の中には、すでに緑の香が漂いはじめていた。

地図にも乗っていない、ヘルシンキ郊外の小さな町にやって来てから、日課のようにサイクリングをしている。私の泊っているマリアの家から森まで、自転車で三十分の道のりだ。

一週間前にはじめて森に連れていってもらった時も、このミニサイクルには苦労した。マリアの乗るサイクリング車はずいぶんと先の方を走り、私はそれになかなか追いつくことができずにいた。

私はサイクリング車には足が全然届かず、それで仕方なく子供用のミニサイクルを借りているのだ。一五六センチという私の身長は確かに小柄な方であるけれど、足の届かない自転車ははじ

めて見た。この国の人間は背が高く、自転車もそれに合わせて大きく作ってあるのではないかと思う。実際ここではなにもかもサイズが大きい。標準サイズが私にはフィットしない。せっかく見つけた色のきれいなサマーセーターも、私が着ると丈が長くてまるでミニのワンピースのようだった。

坂をのぼりきると、急に道が広くなった。振りむくと、民家が遠く点在している。道の左側には工場跡が見えていた。今は草木に取り囲まれたただの廃墟で、鳥の住まいとなっている。ここにあった工場は、南西部に場所を移したのだという。国土の七割も森に覆われているというこの国では、パルプ工業生産が高い比率を占めている、とマリアに説明された。彼女の夫アルトも、木材パルプを作る仕事をしている。

鳥の鳴き声に誘われるように、まっすぐに走っていく。ふたつの車輪に支えられながら、森へ、森へと、ただひたすらに漕いでいくのだ。太陽に照らし出された木のうろを見やりながら走っていると、時折パキパキッと、タイヤの下で枯れ枝が折れる音がした。

自転車から降りると、それを幹の太い大きな木にたてかけるようにして、私は鬱蒼(うっそう)とした森の中へ入っていった。森には香りが満ちあふれている。湿った土の匂い、朽ちた根からは硫黄のような、草からはハッカのような。とりわけ、松の豊かな香は、鼻先ばかりか目の奥までも刺激して、私はまばたきせずにはいられなくなる。

「迷子にならないで」という、マリアの言葉をふっと思いだす。「だいじょうぶ」と私は笑いながら、自信たっぷりに答えたのだっけ。

足もとに落ちている枝を拾い、それで背の高い草をかきわけるようにして歩いてみた。足もとは厚い苔に覆われクッションのようにフワフワして、歩くそばから足音を吸い込んでしまう。

突然の侵入者にハッと息をひそめたかのようにあたりが静まりかえり、震えるような虫の羽の音が、私の耳もとでささやきはじめる。

樹木のあいだごしに見える空が青く澄んでいる日は、森の陰は一層濃くなるようだった。

幾度足を踏み入れても、そのたびにこうして緊張し、ひんやりと神秘的な空気を感じるのは、百年以上生き続けている樹木たちのせいかもしれない。精霊という言葉とその存在を、ここへ来てはじめて信じてみたくなった。おとぎ話の世界のこびとすら、木陰から飛び出してきても、全然不思議ではないだろう。

それにしても、森は自分を受け入れているのか、拒んでいるのか。ただじっと息をひそめて、様子を伺っている。なにか気配を感じて振り返っても、そこには誰もいない。草がかすかに揺れているだけだ。

こわいほどの静けさが、さらに私を森の奥へと誘っていく。

「Maito（牛乳）を買ってきたわ」
私は帰りがけに買ってきた紙パックを二本マリアに渡した。
マリアはちょっとオーバーに手を広げて喜ぶ。育ち盛りの娘ハンナのために、いつでも冷蔵庫にはたくさんの牛乳がはいっているのだ。
「Kiitos（ありがとう）」
肩をポンとたたかれて、私は褒められたあとの子供みたいに肩をすくめた。
マリアとは、二年前の夏、ドイツのチューリンゲン地方で知り合った。幼稚園に勤める私は、何人かの職員とともに、幼児教育の視察旅行に参加していた。子供に絵の指導をしているというマリアは、ドイツを旅行しながら、やはりモデル幼稚園を見にきていたのだ。私たちはそこで顔を合わせ、偶然ホテルも一緒だったために親しくなったのだが、それ以来拙い英語で文通を続けていた。
北欧を訪れるようなことがあれば、うちにステイしていいのよ。
マリアがいつも手紙に記していた言葉をまに受けて、私はここにいる。
遠い国、できる限り遠い場所。そういう場所を求めて、私はここにいる。
そして私は、ここにくる以前から十分に迷い子だったのだ。
森よりももっと深い迷路にはいりこんで。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

2

「自分の国の言葉を口にしなくなって、もう十日以上経ちます。だからといって、その代わりの言葉をうまく喋れるわけではないのですが。でも、言葉がない方が通じてしまうこともこの世にはあると、強く感じています。私は自転車に乗ってばかりいます。自転車で走っていると、いろいろな香りや色を感じます。光の粒子が溶けたような朝の匂いも、夕方のシャーベットのようなピンクの空も、それがないと生活できないほどに気に入ってます。けれど清潔すぎて、なんだか胸が苦しくなってきます。悲しいくらいです。アル中の人に声かけられると、もっと悲しくなるけれど」

そこまで書いて、私はボールペンを置いた。結局いつものように出さずじまいになることだろう。喋るかわりに、こうして私は時々便せんに文字を書いている。

それにしても、彼への思いをこんなに遠くまでひきずってきてしまうなんて。

心というのは、どうして置き去りにできないのだろうか。はりさけても粉々になっても、身体

から抜け出すことはない。かけらがどこかに張りついていて、いくら深呼吸したところでそいつらはびくともしないのだ。思い出のつまった心を、そっくり真新しい心と交換することなど夢なのだろうか。なにかの拍子に鋭いかけらが心の壁を刺すから、痛くてしょうがない。

「Maki」ハンナの甲高い声が一階から聞こえてきた。トントントンッと、階段をのぼってくる。

私の袖を引っぱって、Sauna（サウナ）、Sauna（サウナ）、と繰り返す。

ハンナの金色の髪が、肩先で揺れる。手に持っている人形の髪とそれはとてもよく似て、柔らかくコシがない。私が土産にあげたその着せ替え人形を抱えながら、ハンナはまた一階へ降りていく。部屋の明かりを消して、私も階段を降りていった。

焼けた石の上にひしゃくで湯をかけると、ジュウーッと大きな音がまわりに響き、同時に熱い蒸気がたちこめる。

暖かなベンチに腰掛けながら、私は壁の木目模様をぼんやりと見つめる。ずっと見ていると、木目はなんだか人の目のように見えてくる。

ハンナは上機嫌で鼻歌を歌い、サウナの中にまで持ちこんだ人形の髪を、櫛で一生懸命とかしている。人形の洋服は、脱衣所で自分が脱ぐときに脱がしてあげたようだ。マリアは、温度計の文字を見ている。

何度？　と尋ねると八十度と答えた。マリアは平然とした顔をしているが、私は熱さで身動きが取れなくなっている。汗が、すでに額にも背中のあたりにもふきだしているのがわかった。隣に座る三十三歳のマリアは、母親らしい豊かな乳房をしている。さっきシャワーで洗ったばかりの髪を、指でかきわけるようにして、大きくため息をついている。その横にちょこんと座るハンナ。身体はまだ華奢だが、血管が透けてしまうほどの白さも、なめらかそうな肌も、はっとするほどに美しい。

白木のサウナ室の壁の色に、マリアの髪もハンナの髪も同化しそうだ。私の黒い髪ばかりが、とても目立つのではないかと思う。ベンチに落ちたたった一本の黒い髪の毛に、なぜかいごこちの悪さとばつの悪さをおぼえてしまい、私は下を向く。

とても痩せたのじゃないかと、マリアに尋ねられた。

首を捻り、私はふっとサウナ室の中で熱い息を吐く。その瞬間、胸と胸のあいだを汗がひとすじ流れていった。

足の指先から裏側までも熱く乾燥していくのがわかる。いつ塗ったか忘れてしまったが、足の指にはピンクのペディキュアがいまだについていた。まるでしがみついているみたいに。そういえば以前横山さんがこの指を褒めたことがあった。手の指だけでなく足の指も長くてきれいなんだね、と。

熱された足の指でコツコツと床を鳴らしながら、私はぼんやりと思い出していく。いつだったか、彼と露天風呂に行ったことがあった。

真夜中の伊豆だ。ふたりで湯につかり天を仰ぐと、おびただしい数の星が見えた。チカチカと、それらは強く弱く不規則に瞬いていた。

「流れ星だよ」と横山さんが静かに言った。

「いいなあ、私見なかった」と口をとがらせる。

「また見えるよ、ずっと一か所を見ててごらん」

「ね、目の前の星が一度に全部流れたらおもしろそうね」

「世界が砕けるって感じかな」

「……すてきね、砕けちゃうなんて」

流れ星に願い事をしたいと思った。ずっと一緒にいられるよう、いつか一緒になれるよう。一糸まとわぬ姿で願をかけたら、素直にそれが届きそうな気がする。

湯の上に顔だけ出して、まばたきもせずに空を一心に見ていると、ふいに身体をひき寄せられた。

「誰か来るかもしれない」

「来ないよこんな時間じゃ」

唇が触れ合い、肌が触れ合う。白い私の腕と、日焼けした横山さんの腕が、からみあう。そのからみあった腕の部分だけひんやりとすずしくて、首から下の身体は熱い。熱い湯の中で、さらに自分の身体から何かがわきたって、やがてのぼせていく。それでも湯から出ることはしない。湯の中で、彼を、彼の体温を感じはじめるからだ。湯の中でさえ、それははっきりとわかる。それほどまで彼の身体に慣れはじめていたのだ。どんどん深い場所に追いつめられ、追い求めていき、立ちのぼる湯気の中で、意識さえうすらいでいく。溺れたっていい。私たちは唇を合わせたまま、ブクブクと熱い湯の中に沈みこみ、そして星は見えなくなった。

あの時。彼は私だけのものだった。熱くて溺れそうになりながら、でもどんな時よりも私だけのものだった。彼を、達也からもあの女(ひと)からも奪って。

「Voitko(ヴォイトコ) huonoste(フォノステイ)?（具合が悪いの）」マリアに顔をのぞかれる。

心臓が、とても早く鳴っていた。

「En(エン)（いいえ）」おぼえたてのフィンランド語で答え、首を横に振る。

私は身体中からにじみでてきた汗を洗い流そうと、シャワー室へと向かっていった。

ハンナは相変わらずベンチに座ったまま、はだかの人形を抱き締めている。私と目が合うと、涼しげなブルーの瞳でふっと微笑んだ。

3

太陽は、すべての場所に公平に熱を放ちはしない。日の当たる場所があれば、当たらない場所もある。けれど今この瞬間は、目の前を駆ける誰もに、眩しいほどの光を浴びせかけている。

公園のまんなかで影踏みをはじめたハンナたちは、皆長く黒い影を従えている。木を組んで作ったジャングルジムによりかかって、私は駆けまわる少女たちの足音を聞いていた。

私の前で、彼女らがそのまま日の光に溶けだしてしまうのではないかと思った。白い肌も金色の髪も、戸外ではさらに透明度を増す。ぼんやりと見ていると、そのまま輪郭がぼやけていって、やがて消え入ってしまいそうだ。

頭の上にある太陽は、ジリジリとアスファルトを焦がすような強さは持っていないが、私たちの額に汗を浮かばせることはできる。大切そうに光の破片を肩や髪にとまらせて、少女は駆ける、少年がそれを追う。

そうして走りながら、夏の光を身体に採りこんでいるのだろうか。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.